



少女雑誌の部屋より

今年は昭和100年にあたるということで、3月号(vol.60)では経済が成長した昭和30年代にスポットをあててお届けしましたが、今回はそこから少しさかのぼって昭和20年代(戦後)を振り返ることにいたします。戦争が終わっても悲惨な記憶は人々の心の中に深く刻まれ、恐怖や喪失感に覆われていました。しかし、日々を懸命に生き抜く中で次第に未来への希望を抱くようになり、復興に向けて歩いていきました。

現在開催中の企画展「戦後80年 戦時下を生きた少女たち」内においても戦争の爪痕について触れておりまので、あわせてご覧くださいませ。

昭和をふりかえる ~昭和20年代~

終戦

昭和20年8月14日、御前会議において日本政府はポツダム宣言(無条件降伏を勧告する宣言)を受諾することを決定しました。翌15日正午、天皇による「終戦の詔書」がラジオを通じて全国に放送されました。この玉音放送によって、日本国民は戦争の終結を知ることとなりました。

9月2日、日本政府は米戦艦ミズーリ号上で降伏文書に調印し、正式に第二次世界大戦の終結を迎えました。

占領下の日本

昭和20年8月から昭和27年4月のサンフランシスコ平和条約発効までの約7年間、日本は連合国最高司令官総司令部(以下GHQ)の支配下におかれました。この期間、GHQは新憲法の制定や農地改革を進め、民主主義と基本的人権の確立を促しました。また、教育制度や労働基準法の改革により社会の近代化が進みました。

昭和27年の平和条約発効により、占領は終了。日本は主権を回復し、国際社会に復帰しました。

文化の発展

戦後は日本の文化が大きく発展しました。映画では、戦後の復興を背景に、松竹や東宝などの映画会社が数々の名作を生み出しました。音楽面では、ジャズや歌謡曲が流行し感情豊かな歌詞とメロディーは多くの人々に愛されました。

文学では、太宰治や川端康成などの作家が活躍し、戦後の人々の心情を描いた作品が生まれました。これらの文化的な動きは、戦後の日本社会における人々の希望や苦悩を反映し、豊かな文化の基盤を築くこととなりました。

テレビの出現

昭和28年、テレビの出現によって日本のメディア環境は大きく変化しました。この年、NHKが本格的なテレビ放送を開始し、初のテレビ番組が放送されました。しかし、テレビは高価で、まだ一般家庭には普及していませんでした。

そのため、商店街や公共の場に設置された街頭テレビが公共の娯楽として機能しました。人々は街頭に集まり、ニュースやスポーツ中継を楽しみました。当時のテレビは白黒画面で、放送時間も限られていましたが、その魅力は徐々に広まっていきました。